

被爆地における変化と普遍から、戦前・戦後を考える研究プロジェクト成果報告書

慶應義塾大学SFC 清水唯一朗研究会
(文責:喜納天志)

概要

被爆地における変化と普遍から、戦前・戦後を考える研究プロジェクトは2024年9月18日(金)から2泊3日、広島県にて開催され、16名の学部生が参加した。本フィールドワークでは、呉市と広島市を拠点に、歴史学習、研究発表、そして平和学習を組み合わせた多面的な活動を行った。呉市での防衛施設見学、広島大学の学生との研究交流、そして広島市での平和学習を通じて、歴史と現代の課題を結びつけ、多角的な視点で研究活動を捉えることができた。

○1日目@呉地方総監府、大和ミュージアム

フィールドワーク初日は呉市にて、日本の軍事史と現代の防衛政策に関連する施設見学を中心に進められた。まず海上自衛隊呉地方総監部にて艦船の見学を行い、現代の海上自衛隊の活動について理解を深めた。艦艇内部の案内を現役の乗組員の方にいただき、居住空間や司令室など貴重な経験をさせていただいた。続いて呉地方総監部総司令部を訪問し、今野泰樹幕僚長に案内をしていただいた。歴史がある建物や地下壕などの見学も行い、呉基地の歴史の長さを実感できた見学であった。後半は大和ミュージアムを見学し、第二次世界大戦時の日本海軍の歴史と技術について学んだ。

これらの見学を通じて、学生たちは日本の軍事史と現代の安全保障政策の連続性と変化について考察を深めた。特に、戦前の軍事技術と現代の防衛技術の比較は、多くのゼミ生に強い印象を与えた。



*左から呉地方総監部岸壁、呉地方官幹部総司令部

○2日目@広島市男女共同参画推進センター、広島大学

午前中は広島市男女共同参画推進センターにて、ゼミ内研究発表会を行った。各学生が自身の研究テーマについて15分間の発表を行い、その後10分間の質疑応答時間を設けた。

午後は広島大学文学部史学科日本近代史研究室との合同研究発表会を実施した。口頭発表では、両大学の学生がレジュメに基づいて15分間の発表を行い、その後10分間の質疑応答時間を設けた。普段はあまり馴染みのない史学科の方々の研究手法やテーマにゼミ生一同影響を受けた。加えて、ポスター発表セッションも行われ、広島大学側からは「暴走族と特攻隊の関連性」など興味深いテーマ発表があった。広島大学の学生との交流を通じて、地域の歴史や文化が研究アプローチに与える影響について新たな視点を獲得することができた。本研究会の秋学期の活動では、各々が3度の研究報告をすることとなっているが、広島大学の研究報告から学び、秋学期からの研究報告の方法をレジュメを用いたものにする事とした。



* 左から、全体発表、ポスター発表の様子

○3日目@広島市男女共同参画推進センター、平和記念資料館、原爆ドーム、国立広島原爆死没者追悼平和記念館

3日目の午前中は再び広島市男女共同参画推進センターにて、ゼミ内研究発表の続きを行った。前日の広島大学との交流で得た知見を踏まえ、より深い考察を含んだ発表や質問が多く見られた。

午後は平和記念資料館、原爆ドーム、そして国立広島原爆死没者追悼平和記念館を見学した。平和記念資料館では、原爆の悲惨な被害の実態と、その後の広島の復興の歴史を学んだ。続いて訪れた国立広島原爆死没者追悼平和記念館では、被爆者の名前を検索し実際にいつどこで亡くなったかのデータベースに触れることができた。ゼミ生の一人の祖父母もデータベースに収録されており、タッチパネル越しの映像をよりリアルに感じられた。被爆の痕跡を直接目にする事で、戦争の破壊力と平和の尊さを身をもって感じる事ができた。最後に原爆ドームを訪れ、被爆の痕跡を直接目にする事で、記念館で学んだ内容を実感することができた。

これらの見学を通じて、学生たちは平和の重要性和戦争の悲惨さを改めて認識した。特に、被爆者の証言や遺品の展示、そして原爆ドームの姿は、多くの学生に強い衝撃を与え、平和研究の重要性を再確認する機会となった。核軍縮や国際平和構築における日本の役割について、各自が深く考察する時間となった。



* 左からゼミ生と原爆ドーム、ゼミ内発表の様子

おわりに

本フィールドワークは、研究活動と実地学習を融合させることで、より深い学びと考察をもたらした。呉市での防衛施設見学、広島大学の学生との研究交流、そして広島市での平和学習を通じて、学生たちは歴史、現代政治、そして平和構築の課題を多角的に捉える視点を養うことができた。

特に、防衛施設の見学と平和記念施設(平和記念資料館、原爆ドーム、追悼平和記念館)の訪問という一見相反する経験を通じて、安全保障と平和の両立という複雑な課題について深く考える機会となった。原爆ドームの見学は、平和の尊さと戦争の悲惨さを視覚的に強く印象付け、学生たちの政治、政策、防衛、安全保障研究への動機をさらに強めるものとなった。

また、地元の学生との交流は、地域の文脈が研究にもたらす重要性を認識させるものだった。広島という地の持つ歴史的意義と現代的役割について、より深い理解を得ることができた。

本フィールドワークでの経験は、参加した学生たちの研究活動に新たな深みと広がりをもたらすことが期待される。歴史の生々しい証言と現代の課題を直接結びつけることで、より実践的で意義深い研究の方向性を見出すきっかけとなった。今後も、このような実地研修と研究活動を組み合わせたプログラムを継続し、多面的な視点を持ち、政策形成と国際政治の安定化に貢献できる研究者の育成に努めていく。